

議事録（議事要旨）〔第 1 回会議〕

1. 日 時 平成30年5月15日（火）10:00～12:00
2. 場 所 福井県庁7階 特別会議室
3. 議 題 (1) 平成30・31年度のスケジュールについて
(2) 福井県教育振興基本計画の進捗状況について
4. その他 (1) 高校入試における英検加点制度の見直しについて
5. 出席者 進士五十八座長、安達洋一郎委員、石井パークマン麻子委員、
宇佐美嘉一委員、佐々木知也委員、釣本真史委員、
中嶋茂男委員、吉川雄二委員

東村健治教育長、吉井正雄教育委員、西野里佳教育委員、
八田嘉一郎教育委員、南部隆保教育委員、原公樹教育委員

6. 議事要旨

- 各委員の紹介の後、座長の互選を行い、進士五十八委員が座長に就任した。

<議題>

- 事務局から、会議の設置要領や新計画策定までのスケジュール、現計画の進捗状況について説明を行った。
- 委員から、新聞を読む子どもは、文章の読解力・理解力が高いという数値が出ている。もっと授業の中に新聞を取り入れてほしいという発言があった。
- 委員から、計画の進捗状況に関して、課題も明示すべきではないかとの発言があった。

- 委員から、福井大学教育学部のミッションは、教員養成のみならず、現場の教員が学び続ける、専門性を深化するためにバックアップすることであるとの発言があった。
- 委員から、保護者に高校入試や大学入試がどのように変わるのかが十分に伝わっていないとの発言があった。
- 委員から、PTAは任意団体であり、PTA連合会が解散する時代。一つひとつの単位PTAが今後取り組まなければならないことも検討してほしいとの意見があった。
- 委員から、Uターン・Iターンにつながるよう、小学校や中学校、普通科高校でのキャリア教育を進めてほしい。知らない教員にも地元の企業や産業の魅力を知ってもらうことが大事であるとの発言があった。
- 委員から、各教科で培った基礎・基本をもとに、自ら学ぶ力を育成していかなければならない。例えば、海外で英語を使って地元をPRするなど、各教科で学んだことを生かす場を学校活動の中にできるだけたくさん設ける必要があるとの発言があった。
- 委員から、50代の教員が4割を超える状況を危惧する。彼らの持っている力を若い世代の教員にいかにか引き継ぐか、また、子どもとのアナログな人間関係を大事にしながら、学び続ける教員をいかに育てるかを考えたいという意見があった。
- 委員から、道徳の時間がどれくらい確保されているのか。人として守るべき道、礼儀作法を小さいころから教え込むことが、教育の基本であるとの発言があった。
- 委員から、学習指導だけではなく生活指導等の面でも学校が大きな役割を担うことが期待されている。多くの学校で外部人材の活用に取り組んでいるが、その範囲が広がるほど教員の負担が増える部分もあると感じるとの発言があった。

- 委員から、計画内容が盛りだくさんに示されると、学校現場も一杯一杯になってしまう。目標が達成できている項目については、スリム化できるとよいとの発言があった。
- 委員から、計画では家庭教育や乳幼児教育の部分が薄くなっていると感じるとの発言があった。
- 教育委員から、学力・体力がトップクラスならよいのではなく、夢や希望、郷土愛を持てるような教育を目指す必要があるとの発言があった。
- 教育委員から、性教育やがん教育が計画から抜けている。中学校の学習指導要領の範囲を超えて指導してほしいとの発言があった。
- 教育委員から、福井県の教育は充実しており、受け身になりがちである。そうした教育を受けた子どもは、素直で優等生であるが、個性がない。教員が実体験した話が子どもには刺激になると思うので、若い教員がモチベーションを発揮できるよう、やりたいことがやれるチャンスも作ってほしいという意見があった。
- 教育委員から、AIやビッグデータ等、これからいろいろなことが便利になる時代において、主体的に感じる、考える、表現する、または創造する力が求められるという発言があった。
- 教育委員から、未成年飲酒防止、アルコール依存症などの問題も、食育・酒育の問題であり、教育の一つであるという意見があった。
- 教育委員から、家庭教育に関する考え方にも変化が生じており、社会や学校で代替して担わざるを得なくなっている。学校の中だけでなく、保護者、家庭、地域がどういう役割を担っていくか、全体的な仕組みづくりが課題になるとの発言があった。
- 教育委員から、学力面の取組みをどんどん進めることで、勉強についていけない子どもが出てくることを危惧する。子どもの個性が光るような、全員が希望を持てるような包括的な計画にまとめてほしいという発言があった。ほかの教育委員からも、先に進めることと足元を見つめること、両方が大事であるという発言があった。

- 座長から、人を愛する、慈しむ、自分一人では生きられないということを感じることが、本当の学びであるという意見があった。
- 座長から、全国どこの学校も教育水準は高い。標準化が日本の教育の特色であり、底力であるとも言われるが、個別解を作らないといけないという話もある。福井の学力・体力はすでにトップクラスであるから、これからは、芸術・文化など、それぞれの子どもにあったもの、それを自由にやれるようなことも必要。特徴ある生徒も認めてあげる。そのような時に、先生も特徴があった方がいいという発言があった。
- 座長から、世の中は、ほとんどのことを教育に期待する。世の中の要請を全部受ける子どもや先生は大変である。少し加える程度でいいものと、選択すればいいものを整理して、シンプルにしなければならないとの発言があった。
- 座長から、会議の進め方に関し、委員相互の議論を深めるため、各委員のプロフィールを作成すること、ひとつのテーマに対して主な発言は3、4名にお願いしたいという発言があった。
- 委員から、武生地区を中心にポルトガル語を母国語とする子どもが一定数いる。そういう子どもが、言葉や文化の壁につまずいて、日本に溶け込みにくい実態があると思う。実態が分かるようデータを提供してほしいとの発言があった。

<その他>

- 事務局から、次回の議題となる高校入試について説明した。
- 委員から、次の入試がどうなるか気になるが、今後のスケジュールはあるのかとの質問に対して、事務局から、7、8月を目途に入試要項を公表する予定であると回答した。